鳥取大学研究成果リポジトリ
Tottori University research result repository

タイトル Title	特別支援学校小学部における音楽鑑賞の教材開発 ： トランペットに着目して
著者 Auther(s)	岩谷，英里菜; 鈴木，慎一朗
掲載誌・巻号・ページ Citation	地域学論集 ： 鳥取大学地域学部紀要 , 16 (1) : 91 - 98
刊行日 Issue Date	2019-09-06
資源タイプ Resource Type	紀要論文 / Departmental Bulletin Paper
版区分 Resource Version	出版社版 / Publisher
権利 Rights	注があるものを除き、この著作物は日本国著作権法により保護されています。 / This work is protected under Japanese Copyright Law unless otherwise noted.
DOI	
URL	http://repository.lib.tottori-u.ac.jp/6510

特別支援学校小学部における音楽鑑賞の教材開発
― トランペットに着目して ―

岩谷 英里菜・鈴木 慎一朗

Development of Teaching Materials about Music Appreciation Activities in School for Children with Special Needs
: Focusing on Trumpet

IWATANI Erina, SUZUKI Shinichiro

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）　第16巻　第1号　抜刷
REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol.16 / No.1
令和元年 9月 6日発行　　September 6, 2019

特別支援学校小学部における音楽鑑賞の教材開発

-トランペットに着目して-

岩谷英里菜*・鈴木慎一朗**

Development of Teaching Materials about Music Appreciation Activities in School for Children with Special Needs:

Focusing on Trumpet

IWATANI Erina*, SUZUKI Shinichiro**

キーワード：特別支援学校、音楽鑑賞、教材開発、トランペット

Key Words: School for Children with Special Needs, Music Appreciation Activities, Development of Teaching Materials, Trumpet

はじめに

音楽療法は日本音楽療法学会によると「音楽のもつ生理的、心理的、社会的働きを用いて、心身の障害の回復、機能の維持改善、生活の質の向上、行動の変容などに向けて、音楽を意図的、計画的に使用すること」と定義される[1]。そして音楽療法は、児童から高齢者まで様々な年代を対象としている。さらに南によると、音楽療法の最近の研究の発展はめざましく、内容・方法ともにきわめて充実しており、学校教育において発達障害児に対する特別支援の問題がクローズアップされ、今後、特別支援部門における学校音楽教育と児童の音楽療法はますます接触を深めていくこととなるだろうと述べている[2]。

特別支援学校では、歌や器楽及び身体表現が多く取り入れられており、特別支援学校に在籍する子どもたちにとって音楽は非常に親しみやすいものとなっている。小学校音楽科教科書では、中学年で「トランペットとホルンのひびきに親しむ」ことを目的とし、学習活動が展開されている[3]。しかし、特別支援学校知的障害者用小学部音楽教科書では「トランペットとホルンのひびきに親しむ」ことを目的とした学習活動として位置付けられているものがない。その背景には、トランペットのように音が大きく、華やかな音色を持つ楽器は、障害を抱える子どもにとって、刺激が大きい音となる場合もあることが考えられる。しかし深海によると、トランペットは、高音の緊張度とその極限、低音の（弛）緩度と音域の極限・中音の f（フォルテ）・p（ピアノ）、活動の自由性が女声にそっくりであり、人声に近い楽器ほどなじみやすく、利用されやすいことを述べている[4]。そしてトランペットは吹奏楽やオーケストラで主要な楽器として扱われており、特別支援学校に在籍する子どもたちにとって耳にする機会が多い音である。

ところで近年、障害のある子どももそうでない子どもも一緒の学校で、一緒の教室で学習する統合教育が進められている。音楽の授業を一緒に行った場合、障害のある子どもにとって、小学校音楽科教科書に掲載されているトランペットを扱った曲は教材として妥当なのだろうか。また、どのような配慮が必要なのか。

そこで本研究の目的は、特別支援学校小学部におけるトランペットを扱った鑑賞活動の教材を開発することである。研究方法は、特別支援学校小学部におけるトランペットを扱った鑑賞活動の教材開発を行い、筆者の岩谷が特別支援学校で実験授業を行い、検討する。

*鳥取大学大学院持続性社会創生科学研究科地域学専攻学生

**鳥取大学地域学部地域学科人間形成コース

Ⅰ．トランペットを扱った曲を用いた教材開発

まずは特別支援学校小学部で小学校の音楽科教科書に掲載されている曲を特別支援学校小学部で活用するために、教育芸術社に掲載されている《トランペット吹きの休日》と教育出版に掲載されている《アラ　ホーンパイプ》を扱った教材開発を行っていく。

1. トランペットを扱った曲の解説

ここでは教育芸術社に掲載されているルロイ・アンダソン（Leroy Anderson、1908-1975、米）作曲《トランペット吹きの休日》と教育出版に掲載されているヘンデル（Georg Friedrich Händel、1685-1759、英）作曲「水上の音楽」から《アラ　ホーンパイプ》について述べていく。

(1)《トランペット吹きの休日》

教育芸術社が出版している『小学生の音楽 3　教師用指導書　研究編』によると、この曲は、3 本のトランペットを主役としており、原題は《ビューグル吹きの休日》となっている[5]。ビューグル吹きの若者が休日に楽しく吹いて遊んでいる様子がリズミカルな旋律の流れから感じられる、軽快で陽気な曲である。

(2)《アラ　ホーンパイプ》

《アラ　ホーンパイプ》は、組曲「水上の音楽」の中の曲の 1 曲である。音楽之友社が出版している『最新名曲解説全集　第 4 巻　管弦楽曲　Ⅰ』によると、1717 年夏、テームズ河の舟遊びの際、1 つの舟に 50 人もの楽士をのせて演奏したのが始まりであるということが当時の新聞「デーリー・クーラント」あるいは駐英ブランデンブルク使節ボンネットの報告にある[6]。王は大変満足して、2 度も繰り返させ、さらに晩餐の時にも演奏させたという。

2. 教材開発

ルロイ・アンダソン作曲《トランペット吹きの休日》とヘンデル作曲「水上の音楽」から《アラ　ホーンパイプ》を題材として、教材開発を行う。教材開発を行うにあたり、埼玉県立川越特別支援学校の兵頭祐子の実践を参考にした[7]。兵頭の実践では、鑑賞活動として、パネルシアターを取り入れており、音楽は歌と楽器の生演奏である。この実践を参考にし、視覚的に分かりやすく、児童が鑑賞活動に集中できるように、曲の解説を基にストーリー仕立てにし、そのストーリーの中に鑑賞活動を組み込む形にした。パワーポイントを使用し、開発を行った。また、知的障害児を対象とした教材開発を行う上で、遠山文吉の音・音楽・楽器等を刺激として与える際の配慮を参考にすることとする[8]。遠山は、音・音楽・楽器等を刺激として与える際の配慮として、十分に見せ、聴かせ、触れさせること、小さな音から徐々に大きな音へ、単純な内容から始めて、徐々に複雑な内容へと膨らませていくこと、繰り返しの働きかけを大切にすること、沈黙の活用を心がけること、必ず、個々の子どもの反応・行動を観察しながらかかわりをすることを述べている。これを参考にし、鑑賞活動で使用する曲は 1 曲につき 2 回使用することにした。使用する曲はパワーポイントに音源を貼り付ける形にした[9]。話の題名は、《トランペット吹きの休日》の場合は、児童にとって題名からの想像がつきやすいと考え、曲名を話の題名にするが、《アラ　ホーンパイプ》は曲名を話の題名にすると児童が想像しにくいのではないかと考え、組曲の題名である「水上の音楽」とした。以下より話の題名は「トランペット吹きの休日」と「水上の音楽」とし、曲名は《トランペット吹きの休日》と《アラ　ホーンパイプ》とする。

それぞれの曲を扱ったストーリーは以下の通りである。

(1)「トランペット吹きの休日」

スライド 1　トランペット吹きの休日（題名）

スライド 2　あるところに男の人がいました。その人の名前はジョンと言います。

スライド 3　ジョンは、毎日毎日、畑仕事を一生懸命していました。

スライド 4　ある日、仕事が休みになった日がありました。ジョンは、「今日は何をして過ごそうかな、美味しいものを食べるのもいいし、外に出るのもいいし・・・」と悩んでいました。

スライド 5　そのとき、「あっそうだ、トランペットを吹こう！」とジョンはひらめきました。

スライド 6　ジョンは 1 人では寂しいので、友だちに「一緒にトランペットを吹こうよ。」と言いました。友達は「いいよ」と言い、一緒に吹くことにしました。（1 回目）

スライド 7　ジョンが友達と吹いていると、だんだんと人が集まってきました。「うわあ、こんなに人が集まってる。よーし、もっともっと吹いてみよう」そういってジョンたちはもっともっと吹きました。（2 回目）

スライド 8　すると、たっくさんの人が集まってきて、ジョン達の演奏を聴いていました。ジョンはと

ても楽しい休みの日を過ごしましたとさ。
スライド９　おしまい。

①のストーリーでは、図１であるスライド６で、ジョンが友達と一緒にトランペットを吹くことにした場面の後と、図２であるスライド７で、ジョンたちが吹いていると人が集まり、もう１度吹く場面の後に、鑑賞活動を行うことで、鑑賞活動への流れをつくり、児童が鑑賞活動に集中できるように配慮した。

図１　スライド６

図２　スライド７

(2)「水上の音楽」
スライド１　水上の音楽（題名）
スライド２　むかしむかし、ある国に王様がいました。
スライド３　王様は、船に乗って出かけることが大好きでした。
スライド４　ある日、王様は「わしゃ、船の上で音楽が聴きたいぞ､誰か作ってくれんかのう｣と言い、音楽家に曲を作らせました。
スライド５　音楽家が「王様のために水の上にいるような曲をつくりました」と言い、曲を聴かせました。(1回目)
スライド６　すると、王様は「なんて素晴らしい曲じゃ、もう一度聴かせてくれんか」と言い、聴いていました。(2回目)
スライド７　音楽家が「王様、この曲にはまだ名前がついていないのです｡王様がつけてくれませんか」と言うと、王様は「うむ、よかろう…　この曲を聴くと、水の上にいるような気持ちになるから水上の音楽というのはどうじゃ」と言いました。音楽家は「ありがとうございます。この曲にぴったりな名前です｡」と言い､王様はこの曲を大切にしましたとさ。
スライド８　おしまい。

このストーリーでは、図３であるスライド５で、音楽家が王様に曲を聴かせる場面の後と、図４であるスライド６で、王様が曲をもう一度聴く場面の後に鑑賞活動を行うことで、鑑賞活動への流れをつくり、児童が鑑賞活動に集中できるように配慮した。

図３　スライド５

図４　スライド６

Ⅱ. 鳥取大学附属特別支援学校小学部での実験授業

1. 実験授業の目的と方法

(1) 目的

実験授業の目的は、知的障害を持つ児童に対し、小学校音楽科教科書に掲載されている《トランペット吹きの休日》と《アラ　ホーンパイプ》を用いた鑑賞活動を行う際に、どのような方法が有効である

かを、子どもたちの実験授業の様子を観察し、考察することによって検討することである。

(2)方法

鳥取大学附属特別支援学校の先生と事前打ち合わせを行い、以下の方法で行うこととした。

1)実験日時

2018(平成30)年12月14日（金）

13時50分～14時10分

2)対象

鳥取大学附属特別支援学校小学部　児童10名

小学部1組　6名

小学部2組　4名

3)場所

鳥取大学附属特別支援学校　音楽室

4)記録

倫理的配慮により観察者3名による観察のみとする。

観察者の観点としては、遠山文吉が『知的障害のある子どもへの音楽療法』の中で述べている観察のポイントを参考にした[10]。遠山は観察のポイントとして、子どもが置かれた環境に対する反応・行動、全身の反応（身体の向き、動き、状態等）、細部の反応（目の表情や動き、手の表情や動き・位置、呼吸の状態、声の状態、足の動き・位置、その他）、刺激に対する反応（セラピストの働きかけに対する反応・行動、刺激の質や量の変化に対する反応）、環境の変化に対する反応・行動、他の子どもとの関係で生じる行動、関係性の変化、その他（自発性のある行動の有無、内容、常同行動の変化等）、発作がある場合は、その状況（発作の要因についても考える）、その他（必要に応じて観察する）を挙げている。その中から、全身の反応、細部の反応、刺激に対する反応を基にし、表情、目の動き、体の動き、つぶやき、その他の5項目について顕著なところを書き込む観察用紙を作成した。児童には、図5のように、授業者から見て右側から①とし、⑩までの番号をつけ、観察した。観察者3名は、①から③の児童に対し1名、④から⑥の児童に対し1名、⑦から⑩の児童に対し1名とする。観察者も児童と同じく、図1のように、①から③の観察者を観察者Ⅰ、④から⑥の観察者を観察者Ⅱ、⑦から⑩の観察者を観察者Ⅲとし、観察を行った。

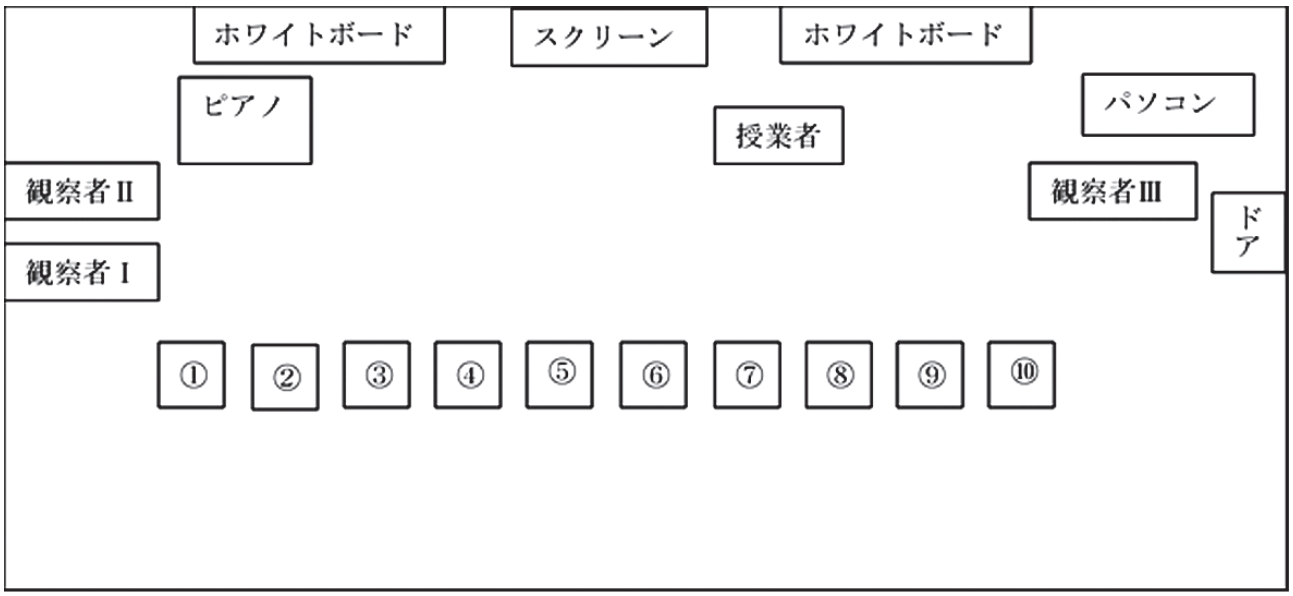

図5　音楽室の配置

5)流れ

最初に、自己紹介をする。次に、サンタクロースがやってきて、実物のトランペットが入ったプレゼントを授業者に渡す。授業者はプレゼントを開け、実物のトランペットを見せ、実際に音を出す。そして、「今日は、この楽器が出てくるお話をみんなで見ようと思います」と言い、実験授業の流れについて視覚教材を用いて説明する。その後、「1つ目はこれです」と言い、《トランペット吹きの休日》が出てくるお話を読む。その後、「どうだった？」と投げかけ、子どものつぶやきを聞き取る。そして、「2つ目はこれです」と言い、《アラ　ホーンパイプ》が出てくるお話を読む。その後、「どうだった？」と投げかけ、子どものつぶやきを聞き取る。2つのお話を聞いて

いるときには、子どもの表情やつぶやきを観察し、記録する。特に、曲が流れる前、流れているとき、曲が終わってからの子どもの様子に着目する。また、音量は、特別支援学校小学部の先生方に聞き、適切な音量にする。最後に、「どちらの曲が好きですか？好きな方にシールを貼って下さい」と言い、ワークシートにシールを貼る活動を行う。自分でシールを貼ることが難しい児童には、鳥取大学附属特別支援学校小学部の先生に支援していただく。最後に、サンタクロースがプレゼントを持ってやってきて、児童に配り、実験授業のまとめをする。

6)配慮事項

土野は、音楽活動を行う上での配慮事項として、音や音楽に過敏な子どもに対しては、絵カードや写真カードを用いて、授業のプログラムを視覚的に提示し、予測をつけられるようにすることを述べている[11]。このことから、本授業は図 6 のように授業者の自己紹介、図 7 から図 9 のように実験授業の流れについて視覚化することで児童が見通しをもって、実験授業に参加することができるようにした。

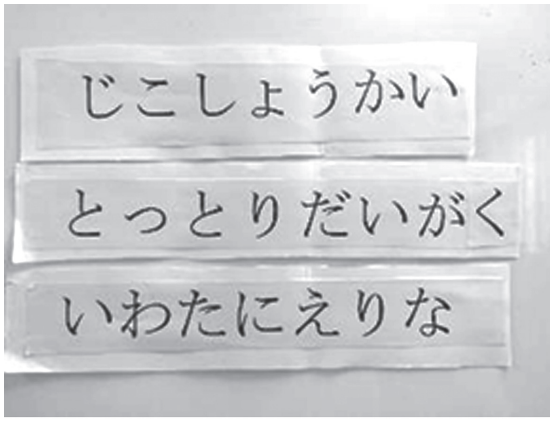

図 6　自己紹介の視覚化

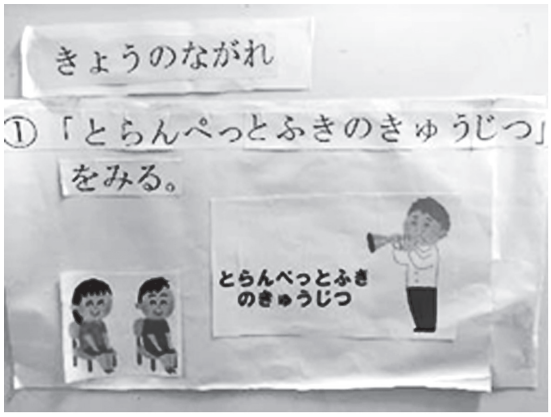

図 7　流れについての視覚化①

図 8　流れについての視覚化②

図 9　流れについての視覚化③

図 7 から図 9 を見ると、授業の流れについて文字とイラストを使用し、児童が実験授業の中で何をするのかを明確にし、提示している。

2. 実験授業の考察

本節では、筆者が行った実験授業について観察記録を基に分析していく。第一に、ストーリー仕立ての教材について分析し、第二に、実験授業で扱った《トランペット吹きの休日》と《アラ　ホーンパイプ》を分析する。

(1)ストーリー仕立ての教材について

実験授業では、パワーポイントとスクリーンを使用し、ストーリー仕立てで授業を行った。この教材について考察していく。図 10 を見ると、スクリーンを使用することによって、視覚的に分かりやすい教材となっている。

図 10　実際のスライド

また、表1を見ると、⑤と⑥の児童は、話を聞くときには、授業者とスライドを交互に見ていたが、曲を聴くときにはスライドをじっと見ている様子があり、流れる曲に耳を傾けていることが明らかになった。

表1　⑤⑥の児童の様子

	目の動き
曲を聴く前(2回目)	⑤⑥授業者とスライドを交互に見る
聴くとき(2回目)	⑤⑥スライドをじっと見ている

「トランペット吹きの休日」で主人公であるジョンとその友達が演奏していると人が集まってくる場面が図11と図12である。その場面を見たときに、表2の様子のように、⑨の児童が見る人が増えたときに「またきた」とつぶやいた。この児童の様子から、⑨の児童が曲を聴きながら、スライドを見ており、スライドに集中している様子が見られた。

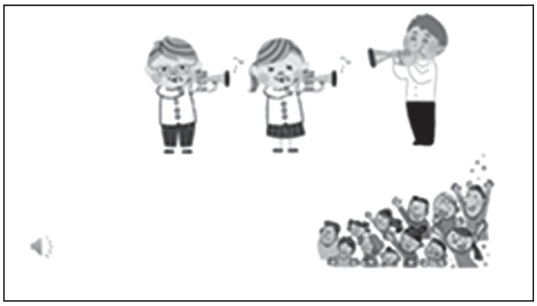

図11　人が集まる前のスライド

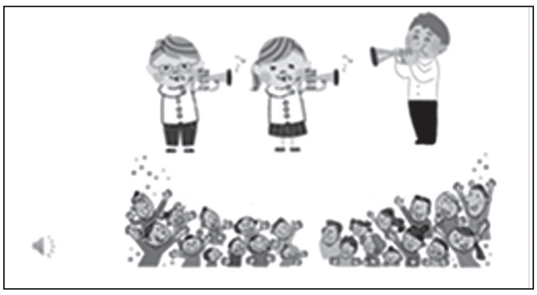

図12　人が集まった後のスライド

表2　⑨の児童の様子

	つぶやき
聴くとき(2回目)	見る人が増えたとき⑨「またきた」

(2)実験授業で扱った曲について

ワークシートの回答をまとめた表3によると、「トランペット吹きの休日」が好きと答えた児童が6名、「水上の音楽」が好きと答えた児童が4名であった。この結果より、《アラ　ホーンパイプ》よりも《トランペット吹きの休日》の方が特別支援学校の子どもにも生かすことができる曲なのではないかと考えられる。

表3　ワークシートの回答のまとめ

番号	性別	トランペット吹きの休日	水上の音楽
①	男	○	
②	男	○	
③	男		○
④	女	○	
⑤	女	○	
⑥	女	○	
⑦	女	○	
⑧	女		○
⑨	男		○
⑩	男		○

中でも、表4を見ると、①の児童は、《トランペット吹きの休日》を聴くときは、2回とも真剣に聴いている様子だった。しかし、表5を見ると、《アラ　ホーンパイプ》の2回目を聴いた後は、口に手を入れ、少し退屈な様子が見られた。①の児童は、ワークシートの「トランペット吹きの休日」にシールを貼っており、曲を聴く様子とワークシートの解答に関係性があることがわかる。

表4　《トランペット吹きの休日》を聴いたときの児童の様子

	表情	目の動き	その他
聴くとき(1回目)	①真剣に聴いている		①耳を傾けている
聴くとき(2回目)	①真剣に聴いている	①少し左右に動いている	①耳を傾けている

表5　《アラ　ホーンパイプ》を聴いたときの児童の様子

	表情	体の動き
聴くとき(1回目)	①表情の変化が1つ目の曲と変わらず、真剣に聴いている	
聴いた後(2回目)		①口に手を入れだした（少し退屈な様子）

3. まとめ

ここまで、実験授業をストーリー仕立ての教材と実験授業で扱った曲に分けて見てきたが、最後に実験授業の分析をまとめ、考察を述べていくこととする。

実験授業を行った結果、第一にパワーポイントとスクリーンを使用し、ストーリー性を持った鑑賞活動を行う教材は、特別支援学校の児童にとって視覚的に分かりやすく、興味を示しながら集中して授業に取り組むことができていた。話を聞くときに、スライドと授業者を交互に見る姿が見られたことから、周囲にいる観察者に気が向くことなく、話に集中していた。児童が話に集中することができていたのは、観察者の立ち位置が児童の視界に入らないように配慮されていたことも要因だと考えられる。第二に、実験授業で扱った曲である《トランペット吹きの休日》と《アラ　ホーンパイプ》は、ワークシートの回答によると《トランペット吹きの休日》が好きな児童が 6 名、《アラ　ホーンパイプ》が好きな児童が 4 名となっており、《アラ　ホーンパイプ》を聴いた後に児童の一人が口に手を入れだし、少し退屈な様子を見せたことから、《アラ　ホーンパイプ》よりも《トランペット吹きの休日》の方が、特別支援学校の児童の興味・関心が高く、児童の興味・関心を引きだすという観点での題材として生かすことができることが明らかになった。しかし、《トランペット吹きの休日》が好きな児童が 6 名、《アラ　ホーンパイプ》が好きな児童が 4 名と大きな差はなく、実験授業で使用した部分は 20〜23 秒程度より、同じ曲であっても他のフレーズであると児童の好みが変化する可能性もあるのではないかと考える。

一方で、児童の観察においては見直しが必要である。第一に、1 名の観察者が 3 名または 4 名の児童を観察することは、一人一人の児童の様子を正確に記録することが困難であり、それぞれの児童の顕著なところを書きだしたので、児童によって記録にばらつきが見られた。10 名の児童の中から何名か児童を抽出し、抽出児童を観察する方法や観察者を増やす方法が考えられる。だが、観察者を増やすと、児童が観察者の方に関心が向く場合や、授業者以外の人が多くなることで緊張してしまい、本来の児童の様子ではなくなる場合も考えられるので検討が必要である。第二に、観察記録の項目も表情、目の動き、体の動き、つぶやき、その他の 5 項目について観察することとしていたが、表情、目の動き、体の動きについては、どのような動きが見られるのか予測し、チェックシート式で作成することによって、観察者が児童の様子を観察しやすくなったのではないかと考える。

以上より、特別支援学校の児童に、パワーポイントとスクリーンを使用し、ストーリー性を持った鑑賞教材は教材として生かすことができ、小学校音楽科教科書に掲載されている楽曲も児童の興味・関心を引きだす観点としての題材として生かすことができるといえる。鑑賞活動として用いる楽曲の長さやフレーズ、観察方法について見直すことで、楽曲に対するより正確な児童の様子を見ることができるのではないかと考えられる。

おわりに

1. 本研究の知見

特別支援学校小学部におけるトランペットを扱った鑑賞活動の教材開発では、視覚的に分かりやすく、鑑賞活動へ集中して参加することができるよう、鑑賞活動までの流れをつくるという視点で行った。そのためにパワーポイントを使用し、ストーリー仕立てにして、ストーリーの中で曲を鑑賞することができる教材を開発した。また、ストーリーは、曲の解説を基にすることで、鑑賞活動だけでなく、曲の解説も学ぶことができる教材となった。

そして鳥取大学附属特別支援学校小学部で実験授業を行い、児童の様子から、開発した教材と実験授業で扱った曲の検討を行った。開発した教材では、パワーポイントとスクリーンを使用することによって、視覚的に分かりやすくなっている。児童の目の動きが、話を聞くときは授業者とスライドを交互に見ているが、曲を聴くときはスライドをじっと見ていることから、鑑賞活動へ集中していると考えられる。鑑賞活動へ集中することができた要因としては、授業の主な活動である「トランペット吹きの休日」と「水上の音楽」の話を聞く活動で話の始めから終わりまでパワーポイントとスクリーンを使用し、話の中に鑑賞活動を取り入れることで、児童がパワーポイントに集中できる環境を設定したことが考えられる。実験授業で扱った曲では、ワークシートの回答で《トランペット吹きの休日》が好きな児童が 6 名、《アラ　ホーンパイプ》が好きな児童が 4 名となっていることと《アラ　ホーンパイプ》を聴いた後に児童の一人が口に手を入れだし、少し退屈な様子が見られたことから《アラ　ホーンパイプ》よりも《トランペット吹きの休日》の方が特別支援学校の子どもは興味・関心が高く、児童の興味・関心を引きだすという観点では題材として生かすことができ

る曲なのではないかと考えられる。しかし、実験授業で使用した部分は20～23秒程度より、同じ曲であっても他のフレーズであると児童の好みが変化する可能性もあるのではないかとも考えられる。

以上の分析や実験授業を通して、鳥取大学附属特別支援学校の児童にとって、ストーリー性を持った鑑賞教材は有効であることが分かった。特にパワーポイントとスクリーンを使用し、楽曲を話の中に組み込むことは、児童が鑑賞活動に集中して取り組む方法のひとつとして挙げられる。

2. 今後の課題

今回、教材を開発し、実験授業を行ったが、用いた楽曲の長さやフレーズ、観察方法について見直す必要があることが分かった。今回の実験授業で用いた《トランペット吹きの休日》と《アラ　ホーンパイプ》は、どちらの曲もワンフレーズで長さも20～23秒程度としている。今回用いていないフレーズを使用した場合も考察してから、2 曲が特別支援学校の児童に生かすことができるかを考察することが課題である。

観察方法に関しては、児童の様子の記録にばらつきが見られないように、児童を抽出し観察する方法、観察者を増やす方法、観察用紙にチェック項目の箇所を作る方法など、様々な観察方法を考え、児童一人一人に対し、インタビュー調査を行うといった方法も取り入れる必要があると考える。

以上の課題について、今後さらに研究を行うことにより明らかにしていきたい。

謝辞

鳥取大学附属特別支援学校小学部には、ご指導やご協力をいただくとともに、お忙しい中にもかかわらず実験授業をご快諾いただいたことに深く感謝いたします。

付記

本稿は2018（平成30）年度鳥取大学地域学部卒業論文「特別支援学校小学部における音楽鑑賞の教材開発－トランペットに着目して－」の第3章、第4章に基づいている。

本稿の一部は、日本音楽教育学会中国四国地区例会（2019年3月、於：福山市立大学）において口頭発表した。

注

1 土野研治『障害児の音楽療法　声・身体・コミュニケーション』春秋社、2014年、p.47。
2 南曜子「音楽療法と音楽教育」日本音楽教育学会編『音楽教育学の未来』音楽之友社、2009年、pp.304-305。
3 小原光一・飯沼信義・浦田健次郎監修『小学生の音楽３』教育芸術社、2016年、pp.44-45。
4 深海善次『吹奏楽法　楽器論と編曲法』音楽之友社、1957年、p.187。
5 小原光一・飯沼信義・浦田健次郎監修『小学生の音楽3 教師用指導書　研究編』教育芸術社、2015年、p.120。
6 淺香淳　『最新名曲解説全集　第4巻　管弦楽集Ⅰ』音楽之友社、1980年、pp.57-60。
7 兵頭祐子「子どもたちに豊かな音楽体験を！～鑑賞「月夜の音楽会」を通して～」竹林地毅監修『新時代の知的障害特別支援学校の音楽指導』ジアース教育新社、2015年、pp.50-55。
8 遠山文吉『知的障害のある子どもへの音楽療法：子どもを生き生きさせる音楽の力』明治図書出版、2005年、pp.63-65。
9 パワーポイントに貼り付けた曲の音源は、教育芸術社と教育出版が出版している教師用指導書に付属されているCDを使用した。
10 前掲書、遠山、2005年、pp.53-54。
11 前掲書、土野、2014年、pp.198-199。